

重要文化的景観 「東草野の山村景観」の取り組み 滋賀県米原市

日 時： ① 2021年6月15日 15:30～16:30
② 2021年6月22日 14:00～19:00
場 所：①米原市役所山東自治センター
②米原市役所
インフォーマント：高橋 順之氏（米原市教育委員会事務局生涯学習課 主幹）※主管課
小野 航氏（米原市教育委員会事務局生涯学習課）※主管課
調査者：上杉 和央（文学部歴史学科准教授・京都地域未来創造センター統括マネージャー）
「東草野の山村景観」整備活用委員会委員
鈴木 暁子（京都地域未来創造センターコーディネーター）
今堀 誠弥（京都地域未来創造センター研究員）②のみ
竹内 祥一朗（文学研究科博士後期課程2回生）①のみ
まとめ作成者：鈴木 暁子（文責）・今堀 誠弥

滋賀県米原市東草野地域

滋賀県米原市の旧伊吹町 東草野地域は、滋賀県東北部に位置し、姉川上流の谷部に形成された山村で、甲津原、曲谷、甲賀、吉楸の4つの集落から構成されている。例年約3メートルの積雪が観測されている西日本屈指の豪雪地である。民家や集落内の水路等には消雪に用いられるなどの豪雪に対応した特徴がみられる。また、習俗からも峠道を介した他地域との交流も古くから行われてきたことがうかがえる。

こうした東草野地域での価値を適切に保存していくことを目的に、2013年3月に米原市教育委員会では、「米原市東草野の山村景観保存活用計画」を策定し、翌年の2014年に重要文化的景観「東草野の山村景観」に選定された。滋賀県内では4番目の選定と

なるが、今までは琵琶湖岸の景観だったのに対し、山間地域（水源地域）として初めての選定となった。

今回の調査では、選定に関わった6つの部署の職員13名と東草野地域の地域づくり2団体（東草野まちづくり懇話会及び暮らしソフト研究所）に、対面でそれぞれにインタビューを行った。そのうち、本稿では、主管課である米原市教育委員会の高橋順之氏と小野航氏に行ったインタビュー内容を元に、重要文化的景観の選定の経緯、その後の取り組みの課題の内容を中心に、項目ごとにまとめたものである。多忙な中、インタビューや現地見学、資料提供に協力いただいた高橋氏、小野氏の2名にお礼を述べたい。

なお、他部署および地域づくり団体へのインタビュー内容については、紙面の都合もあり、別稿にて改めて報告する予定である。

米原市の概要

滋賀県米原市は、2005年2月14日、坂田郡山東町、坂田郡伊吹町、坂田郡米原町の3つの町が合併して誕生。また、2005年10月1日には、米原市と坂田郡近江町が合併し、旧坂田郡が一つとなり新たな米原市となった¹⁾。

米原市のなかでも東北部に位置し、東草野地域を含む旧伊吹町では、1952年、大阪セメント伊吹工場の誘致によって、それまで炭焼きや農業、林業などを行っていた住民が工場労働者として工場で働くようになり、炭焼きという伝統産業が急速に衰退することになる。また、同時に伊吹山および姉川周辺の資源開発に焦点が当たり姉川ダム建設や観光事業が推進される。1970年には最北部の甲津原に奥伊吹スキー場が開設され、道路の拡張や民宿の開設が進んでいく。現在でも、奥伊吹スキー場はグランスノー奥伊吹と名称を変え、関西最大のスキー場としてにぎわいを見せており、東草野地域に大きな影響を与えている。

東草野地域の4つの集落の人口の推移

旧伊吹町は、少子化、高齢化が急速に進んでいる地域であり、北部にある4つの集落（甲津原、曲谷、甲賀、吉槻）の高齢化率は米原市平均の2倍を超え、約46%となっている。表1は、東草野地域の4つの集落の人口の推移である。各集落とも、1965年と2019年を比較すると、人口は2分の1から3分の1以下になっている。

一方で、人口は減少しているものの、年代別の人口構成には変化がみられる。過去10年間で、65歳以上の人口割合が49%から44%と5%減少し、わずかではあるものの若返っている。その主要な要因は、最北部に位置する集落、甲津原での子どもの増加である。2009年にはゼロだった子どもの数が子育て世代の移住によって2019年には子どもが12人となっている。

米原市の地域振興の取り組み

きっかけは「水源の里 まいばらみらい条例」の制定

米原市では、こうした少子化や高齢化を受けて、2009年6月に、地域振興策として「水源の里 まいばらみらい条例」を制定。過疎化が進む集落の持続的な発展を目指し、農山村地域の活性化に向け、東草野地域を含む、姉川上流の2地域8集落を重点施策対象地域として指定し、集落支援のための実態調査を行った。

その結果、地域課題の解決の担い手の必要性、新たな人材や移住者の受け入れに対して前向きであること分かり、東草野地域に、4名の「水源の里 まいばら みらい・つくり隊」（地域おこし協力隊）が移り住み、活動をするようになった。こうした取り組みを経て、定住者は10名を超えている。



図1 聞き取りの様子 米原市教育委員会
高橋氏（左）、小野氏（右）

表1 東草野地域集落の人口の推移

出典：重要文化的景観「米原市東草野の山村景観 整備活用計画書」
米原市教育委員会（2021.3）12ページより 鈴木作成

集落名	1965 (S40) (人口)	1965 (S40) (世帯数)	1980 (S55) (人口)	1980 (S55) (世帯数)	2019 (H31) (人口)	2019 (H31) (世帯数)	1965→2019 人口減少率
甲津原	285	67	185	68	91	39	68.03%
曲谷	152	41	114	40	59	27	61.18%
甲賀	136	38	114	33	58	26	57.35%
吉槻	295	84	252	75	86	38	70.85%
計	868	230	665	230	294	130	66.13%

住民による地域づくり活動

市町村合併後の2006年には、東草野の4集落の住民から構成される東草野まちづくり懇話会が設立された。同懇話会では、行政の補助金を得て、自然資源を活用したエネルギー事業や、地域活性化事業、空き家の解消に取り組んでいる。そのほかにも、複数の団体が、伊吹山でのイベント開催、薬草の普及、空き家バンクの運営など地域振興のためのモデル事業を展開している。

2021年6月には、曲谷にある公共施設「石臼荘」をリノベーションしてカフェ&レストラン「MAGATANIA」がオープン。経営する藤田氏は、東草野地域に魅かれて曲谷に移住した住民で、暮らシフト研究所という団体の代表も務めている。このほかにも、ペンショ

ンやレストランを経営し、地域づくりにも関わる移住者も少しずつ増えつつある。

重要文化的景観の選定に向けた取り組み

取り組みのきっかけ

米原市教育委員会の文化財担当者で事務局として選定の取り組みにも関わった高橋氏は、元々は、文化的景観の仕組み自体を知らなかったという。高橋氏は、東草野地域で埋蔵物が良好な状態で残っていたため文化財指定をしようと考えていたところ、滋賀県が重要文化的景観の取り組みに積極的であったことを知り、文化庁の反応も良かったため、選定に向けた取り組みに着手することになった。



図2 重要文化的景観「東草野の山村景観」(甲津原)

東草野地域を選んだ理由

東草野地域はもともと、他地域との交流が盛んな地域で、交流雪合戦や農業体験のイベントなど山村と都市との交流をしていたこともあり、よその地域を受け入れるのは得意な地域である。市役所の他の部署でも東草野地域で事業を行っている。高橋氏自身、元々、何十年と関わりがあった地域でもありたくさん知り合いがいたこと、魅力と可能性がある地域で「なにかやってみたい」と考えていたという。また、地域の状況として、過疎化に対する危機感が高く、市町村合併前の旧伊吹町の時代から、活発に地域振興の活動を展開していたことも選定を後押しした。

選定範囲の決め方

高橋氏は、当初から、甲津原、曲谷、甲賀、吉槻の4つの集落を選定範囲として考えていた。その理由は、4つの集落が川筋で並んでおり、まちづくり懇話会も4つの集落のメンバーで構成されているからであるという。4つの集落を調べるうちにバラバラの特性を持つことが分かったが、それが山間集落として面白いと考えて、「雪」を共通点として取りまとめてまとめていった。

選定後の取り組みや課題

選定後の地域での反応

選定後の地域での反応について、興味深いエピソードがある。高橋氏によれば、東草野という地名が知られるようになったのは選定後以降ではないかという。東草野という地名は、旧伊吹町以外の住民には知られておらず、選定時も名称をめぐって議論があった。奥伊吹スキー場があるため、奥伊吹の方が対外的にも知名度はあるのではないかという意見もあったが、ある集落から「自分の集落は奥伊吹ではない」という意見があり、結局、東草野という地名を使うことになった。今では、ケーブルテレビでも東草野という地名が使われるようになっており、良かったのではないかと思うとのことであった。

整備活用委員会による整備保存計画書の策定

2014年の重要文化的景観の選定後は主だった動きはあまりなかったが、2019年に、整備活用計画書の策定に向けて整備活用委員会を組織し、他の部署を巻き込んで準備を進めていった。整備活用委員会の構成メンバー



図3 奥伊吹ふるさと伝承館

は17名、大学教員などの有識者、4つの集落の自治会から推薦を受けた地域住民、市役所の関係部署（政策推進課、商工観光課、山東伊吹地域振興課、米原近江地域振興課、都市計画課、林務課：いずれも当時の部署名）からなる。委員長には、景観・建造物を専門とする濱崎先生（滋賀大学名誉教授）が就任し、副委員長は東草野まちづくり懇話会の法雲先生が就任するという構成であった。加えて、文化庁や滋賀県文化財保存課も指導役として支援を行った。2021年2月の東草野まちづくり懇話会総会で整備保存計画の説明を行い、2021年3月に、整備保存計画を策定した。今後は、年1回の頻度で、委員会を開催する予定という。

行政側の取り組みや課題

東草野地域では、市役所の他の部署（農林商工課、シティセールス課）も、それぞれ、自伐型農業、空き家、移住定住、地域活性化に関わる事業を展開している。滋賀県庁もモデル事業等を行っており、東草野地域に関わっている部署が連絡調整できる体制があるという。

一方で、課題としては、地域住民に重要な文化的景観があまり知られていないことが挙げられる。2019年に、東草野小中学校の跡地利用に関して、東草野小学校利活用検討

委員会が、東草野地域の地域住民へのアンケートを実施した。アンケートは、4つの集落あわせて129人に送付し、65名から回答を得た（回答率は約50%）。質問は、属性、田畑や住宅の現状、地域への愛着や自治会活動への関心に関する項目であるが、重要な文化的景観に関わる認知度についても聞いている。

アンケート結果によると、65%の住民は重要な文化的景観について知っているとは回答したが、全く知らない・分からないと回答した住民も10名（約15%）となっている。地域住民に重要な文化的景観を知ってもらうための取り組みが今後の課題であることがわかる²。

今後、なにかひとつ象徴的な修理を行うことで、地域住民に地域が変わったという印象を持ってもらうこと、そして、冒頭で紹介したような地域づくりのさまざまなプレイヤーと一緒に活動を行い、目に見える変化をつくるのが重要になるであろう。

文末脚注

¹2021年5月には、別々の庁舎（山東、伊吹、米原、近江庁舎）を一元化し、米原駅前に建設した新庁舎に移転した。

²重要な文化的景観「米原市 東草野の山村景観整備活用計画書」（2021.3）91-103頁。



図4 イケ



図5 聞き取りの様子